

ねん がつとおか
2020年4月10日
せいぎんようび しゅ じゆなん てんれい
聖金曜日・主の受難の典礼
きくち いさおだいしきょうせつきょう
菊地 功 大司教 説教

せかい ひと いま きき ちよくめん
世界のすべての人たちと共に、わたしたちは今、いのちの危機に直面し
ています。そこから逃れる術をまだ知らず、ただただ神に助けを求めて苦
しんでいます。わたしたちと同じ人となられ、人間として苦しみを耐えし
のぼれた主の十字架を仰ぎ見ながら、苦しみに直面しているわたした
ちが、そこから何を学ぶことができるのか。日々、黙想しています。

せいかつ なか あ まえ じゆんばん うしな いま
生活の中で当たり前であったことを、順番に失いつつある今、わたし
たちは生き方を変えるように促されていると感じます。

しゅ た の し の くる じゅうじかじょう じゆなん し
主イエスが耐え忍ばれた苦しみに、十字架上の受難と死をあらためて
心に刻む今日の典礼は、主の苦しみが自分とは無関係な苦しみでは
なく、まさしくわたしたちのための苦しみであったことを思い起こすよう
と、招いています。

だい ろうどく よげん かれ にな やまい かれ お
第一朗読のイザヤの預言には、「彼が担ったのはわたしたちの病。彼が負
ったのはわたしたちの痛みであった・・・彼が刺し貫かれたのは、わたし
たちの背きのためであり、彼が打ち砕かれたのは、私たちの咎のためで
あった」と記されていました。

じんるい すく ぬし しゅ おか つみ くる
人類の救い主である主イエスが、わたしたちの犯した罪と苦しみをすべ
て背負われて、贖いのいけにえとして、十字架の上で命をささげたの
だと思い起こさせる、預言者の言葉です。

しゅ くる い うなが
この主の苦しみに、わたしたちにどう生きるようにと促しているのでしょ

う。

じゅうじ かじょう はげ くる なか しゅ かたわ はは
十字架 上 で激しい苦しみの中にある主イエスの 傍 らには、母 マリア
あい でした じゅなん ろうどく しる
と愛する弟子が立っていたと、受難の朗読に記されていました。

くる なか きき ちよくめん しゅ なか た
苦しみの中でいのちの危機に 直 面していた主は、その中にもあっても、他
ひとびと はいりよ わす じぶん くる た
の人々へ配慮することを忘れません。自分の苦しみを耐えしのぶことで
せい いっぱい しゅ たしや
精一杯であったことでしょう。しかし、それでも主イエスは、他者への
こころくば み かみ あい しゅ こころ
心 配りを見せるのです。神の愛そのものである主の 心 は、いつくしみ
おも
と 思いやりにあふれています。

ふじん らん こ はは かた あい だし
「婦人よ、ご覧なさい。あなたの子です」と母マリアに語りかけ、愛する弟子
だいはりょう きょうかいきょうどうたい せいぼ
ヨハネが代 表 する 教会 共 同 体 を、聖母にゆだねられました。またそ
のヨハネに「見なさい。あなたの母です」と語りかけられて、聖母マリア
きょうかい はは さだ きょうかい せいぼ
を 教会の母と定められました。まさしくこのときから、教会は聖母マ
りあとともに主の 十字架の 傍 らに立ち続けているのです。

ぜんしょうがい つう た しの くる よ そ
その全 生涯を通じて、イエスの耐え忍ばれた苦しみに寄り添い、イエス
くる た しの かんぜん もの かみ
とともにその苦しみを耐え忍ばれたことによって、「完全な者」として神
みと せいぼ しょうがい しょうちょう じゅうじか かたわ
に認められた聖母マリアの生涯を象 徴 するのは、十字架の 傍 ら
た すがた じゅうじかじょう わたし すく みなもと
に立つ 姿 です。十字架 上 のイエスは 私 たちの救いの 源 であり、
かたわ た せいぼ きぼう
傍 らに立つ聖母マリアはその希望のしるしです。

わたし おな かんぜん もの もと せいぼ
私 たちも、同じように、「完全な者」となることを求めて、聖母マリア
じゅうじか かたわ た つづ おも かみ たみ きょう
とともに十字架の 傍 らに立ち続けたいと思います。神の民である 教
かい せいぼ おな くる こころ じぶん
会 は、聖母マリアと同じようにイエスの苦しみに 心 をあわせ、自分のた
めではなくすべての人のために、神の望まれる道を、「お言葉通りにこの身
あゆ つづ ゆうき も
になりますように」と、歩み続ける 勇 気を持たなくてはなりません。

じゅうじか ふっかつ えいこう きぼう じゅうじか はいぼく
十字架は、復活の栄光へとつながる希望です。十字架は敗北ではあ
りません。その苦し^{くる}みと死^しですべてが終^おわってしまう敗北^{はいぼく}の象^{しょう}徴^{ちよう}ではあ
りません。主イエスは、十字架^{じゅうじか}の苦し^{くる}みを通^{つう}じてすべてを無^むにして神^{かみ}に
ささ^{ゆえ}げたが故^{ふっかつ}に、復活^{えいこう}の栄光^{とうたつ}に到^{たつ}達^{たつ}しました。ですからわたしたちにと
つて、十字架^{じゅうじか}は希望^{きぼう}です。

きょうかい せいぼ じゅうじか かたわ た つづ くる
教会は、聖母^{せいぼ}マリアと共に、十字架^{じゅうじか}の傍^{かたわ}らに立^たち続^{つづ}けながら、苦し^{くる}
みを耐^たえ忍^{しの}びつつ、十字架^{じゅうじか}がもたら^{あた}す新^{あたら}しいのちへの希望^{きぼう}を高^{たか}く掲^{かか}
げようとしています。

くる なか たしゃ はいりよ わす しゅ じしん なら
苦し^{くる}みの中^{なか}にあっても他^た者^{しゃ}への配^{はい}慮^{りよ}を忘^{わす}れない主^{しゅ}ご自^じ身^{しん}に倣^{なら}うように、
聖母^{せいぼ}マリアも、苦し^{くる}みの人^{じん}生^{せい}を歩^{あゆ}みながら他^た者^{しゃ}への配^{はい}慮^{りよ}を忘^{わす}れない存^{ぞん}
在^{ざい}です。神^{かみ}にすべてを捧^{ささ}げ、心^{こころ}が剣^{けん}に刺^さし貫^{つらぬ}かれる苦し^{くる}みの生^{しょう}涯^{がい}で
あつたにもかかわらず、常^{つね}に他^た者^{しゃ}への心^{こころ}遣^{づか}いを忘^{わす}れない生^いき方^{かた}です。

きょうかい しゅ じゅうじか かたわ た つづ しゅ じしん なら
教会は主イエスの十字架^{じゅうじか}の傍^{かたわ}らに立^たち続^{つづ}けながら、主^{しゅ}ご自^じ身^{しん}に倣^{なら}
つて、また母^{はは}である聖母^{せいぼ}マリアに倣^{なら}って、苦し^{くる}みの中^{なか}にあっても、助^{たす}けを求^{もと}
めている人^{ひと}、弱^{よわ}い立^{たち}場^ばにある人^{ひと}、忘^{わす}れ去^さられた人^{ひと}、排^{はい}除^{じょ}された人^{ひと}、苦^{くる}
しみにある人^{ひと}への心^{こころ}配^{くば}りを忘^{わす}れない教会^{きょうかい}であり続^{つづ}けようとしていま
す。

ひと かみ ことば やど はぐく せいぼ きょう
人^{ひと}となられた神^{かみ}の言^{ことば}葉^{やど}を宿^{はぐく}され、そのい^{せい}のち^ぼを育^{きょう}んだ聖母^{せいぼ}マリアを教
会^{かい}の母^{はは}とすることで、主イエスは、い^{しゅ}のち^{そんげん}の尊^{せきむ}厳^{きょうかい}をまもる責^{せきむ}務^{きょうかい}を教
会^{かい}
に与^{あた}えられました。

きょうかい しゅ じゅうじか かたわ た つづ こんなん
教会は主イエスの十字架^{じゅうじか}の傍^{かたわ}らに立^たち続^{つづ}けながら、どのような困^{こん}難^{なん}
な中^{なか}にあっても、神^{かみ}の賜^{たま}物^{もの}であるい^{さい}のち^{ゆうせん}をまもることが最^{さい}優^{ゆう}先^{せん}なのだ^{のだ}と、

こんなん ただなか じかく あら
困難の直中であって自覚を新たにしています。

かんせんしょう かくだい こんなん なか おお いるようかんけいしゃ
いま、感染症の拡大という困難の中であって、多くの医療関係者
が、いのちを守るために、日夜働いておられます。自分自身もいのちの危機
となあ なか うしな ちょうせん つづ
と隣り合わせの中で、いのちを失うことのないように、挑戦を続けて
おられます。その働きに感謝すると共に、彼ら自身の健康を、いのち
あた おも かみ こころ いの おも
の与え主である神がまもってくださいるように、心から祈りたいと思いま
す。

いるようかんけいしゃ けんしんてき はたら きょうかい まな おも
医療関係者の献身的な働きに、わたしたち教会も学びたいと思
います。

じゅうじかじょう しゅ くる い うなが
十字架上の主の苦しみは、わたしたちにどう生きるようにと促してい
るのか。教皇フランシスコはたびたび、無関心のグローバル化と、むなし
いシャボン玉に閉じこもった利己主義が、多くのいのちを奪っているのだ
してき あたら ふへんてき れんたい ひつようせい と
と指摘され、「新しい普遍的な連帯」の必要性を説いていました。

いませかい れんたい い のこ じっかん たが
今世界は、連帯しなければ生き残れないのだと、実感しています。互い
たす あ たいせつ たいけん くる ただなか
に助け合うことの大切さを、体験しています。苦しみの直中であっても、
たしや こころ くば じゅうよう まな じっさい あつ
他者のために心を配ることの重要さを、学んでいます。実際に集ま
っていなくても、心のきずなで結びあわされて、共同体を創ることが
できるということを、目の当たりにしています。

くる なか かんぜん もの みち もと じゅうじか
苦しみの中にあるときにこそ、より「完全な者」となる道を求め、十字架
くる こころ あ じゅうじか さし め ふっかつ えいこう きぼう
の苦しみに心を合わせ、その十字架が指し示す復活の栄光と希望を
めざ かみ あい み せかい じっげん
目指しながら、神の愛といつくしみが満ちあふれる世界の実現のために、
いまあゆ はじ
今歩みを始めましょう。